

学校と家庭・地域を結ぶ

白布城だより

栃木県立真岡高等学校定時制 栃木県真岡市白布ヶ丘24番地1 〒321-4331
Ter. 0285-82-3413 fax. 0285-82-2913

●巻頭言●

グリット(やり抜く力)

教頭 植竹 暁

保護者の皆様並びに定時制後援会、地域の皆様には、日頃から本校の教育活動に多大なるご協力とご支援をいただいておりますことに、心より感謝申し上げます。

さて、新型コロナウイルスに翻弄され続けた2020年でしたが、この2学期は様々な学校行事を実施することができました。地域のロータリークラブの方々と一緒に行った学校周辺の清掃活動では熱心にゴミを拾う生徒の姿が、生徒会役員が趣向を凝らした定時制祭では教員と一緒にゲームを楽しむ生徒の姿が、東北方面への修学旅行では中尊寺などの史跡を興味深そうに見学する生徒の姿や、南三陸町での震災学習で語り部の話を真剣に聴く生徒の姿がありました。各行事から何かを学び、感じた生徒がいることを願っています。

南三陸町での震災学習は私自身も大変印象に残りました。南三陸町といえば、同町の女性職員が、津波が押し寄せる直前まで防災庁舎の放送で住民に避難を呼びかけ、犠牲になったことを思い出す方もいると思います。現在、同庁舎は建物の骨組みだけが遺構として残されており、ぐにやりと折れ曲がった鉄骨が津波の威力を物語っていました。3階建て庁舎の屋上に逃げた職員43名も、15mを超える津波に襲われ亡くなりましたが、その屋上を見上げ、にわかには信じがたい津波の高さを実感しました。復興のシンボル「さんさん商店街」は、かつての中心市街地を約10mかさ上げした土地に整備されており、その土の量は10tダンプカー60万台分に相当するそうです。数年間にわたる、とてつもないスケールの土木事業により形成されつつある新たな町並み。困難を乗り越えて、新しい町づくりを進める人々の、力強さを感じずにはいられませんでした。

ところで、近年、「グリット(GRIT)」という言葉が各界で注目されています。どの分野であれ、成果を上げた人に共通する特徴は、一つの目標に興味を持ち続けて取り組む「情熱」と、困難や挫折を味わっても諦めずに努力を続ける「粘り強さ」、すなわち「グリット=やり抜く力」であり、成功や達成には、才能よりも「やり抜く力」が必要であると、グリット研究の第一人者アンジェラ・ダックワース教授は結論づけています。「やり抜く力」を伸ばしていくための最初のステップは、興味を持つことを見つけて、それに取り組み続けることです。ですから、われわれ教員は、日々の授業や、学校行事、部活動など、様々な機会を通して生徒の興味・関心を喚起していくこと、そして、生徒が興味・関心を持ったことに取り組み続けられるよう、時に励まし、時に助言を与えて、生徒を支援していくことが大切ではないかと考えています。

最後になりますが、保護者の皆様並びに定時制後援会、地域の皆様には、来年も引き続き、本校の教育活動へのご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。それでは、皆様、どうぞよいお年をお迎えください。

▲▲8月▲▲

第2学期始業式



晴れて、まだまだ暑い27日(木曜日)。今年度の第2学期始業式が本校記念館で行われました。普段よりかなり短い夏休みでしたが、生徒達は、元気に登校しました。

前橋 均校長は、生徒に向かって、①三日坊主もいいじゃないか! ②太陽の下で自分の影を見ない方法を知ってる? ③新型コロナウイルス禍の今後の生活④自分の夢に向かって!などの、非常に中味の濃い話をされました。

「三日坊主」は、前橋校長は、三日坊主で終わってしまっても、「また、やってみよう。」と始めれば、それはポジティブな生き方になる。四日続いた、五日続いたとなれば、『結構、続いているな!』と、新しい自分を発見することになる。「自分は甘いな…。」と、思う人は、本当は「甘く」ないのです。と、話されました。また、「影

を見ない方法」は、「上を向いて、ポジティブに生きよう!」という事だ、さらに、新型コロナウイルスの話では、誰でも感染する可能性があるのだから、「かかってしまった友達がいても、そのことを、責めたりするのはやめよう」。特に、SNS等を使って、「興味本位で話題にしてはいけない。」と、話されました。

国際理解教育

この日も、晴れて暑い日でした。今年度は、28日（金曜日）の3、4限目に行われました。前橋校長から、「世界にはさまざまな考え方をを持った人たちがいる。今の時代、そのような人たちとともに働いたり活動したりすることが当たり前のことになった。そんな社会の基本は、『一緒に認め合うこと』だ。今日の講演は、日中交流を主に通訳や案内の仕事をしている小玉哲弥先生と専門学校で日本語を教えている針谷花絵子先生をお招きしました。」と、挨拶があり、各先生からリアルな話を聞くことができました。

両先生からは、「通訳という仕事は、AさんとBさんの間に立って、コミュニケーションをとることです。そこに、自分の主観を入れてはいけません。また、案内士という仕事は、自分が中心になって相手を引っばっていかなくてはならない。主観をきちんと持って、コミュニケーションを持たなければいけないのです。」と話され、「高校生の皆さんは、今から、外国人に慣れておくことが将来大きな力になると思います。」と、話されました。

生徒達も、興味津々に話を聞いていました。

▲▲9月▲▲

第2回生徒総会・同役員任命

4日（金曜日）、今年度、第2回目の生徒総会が行われました。1学期の選挙で選ばれた生徒会長、生徒会副会長のほかの生徒執行部が信任されました。

後期生徒会役員は次の通りです。皆さん、よろしくお祈りします。（ ）数字は、学年次

会長	臼井 城依	(3)		
副会長	直井 蓮	(3)	渡邊 紫音	(2)
書記	廣本 波美	(3)	新山 叶翔	(2)
会計	篠原 匠	(3)	福田 真美	(2)
会計監査	八谷 花梨	(1)	ピント ジオ	(1)

後期第1回専門委員会

生徒総会に引き続き、各教室に分散して専門委員会が開かれました。後期委員の初会合です。今年度後半の活動の確認や役割分担などが話し合われて、実質的な委員会活動ができる態勢になりました。

主権者教育

11日（金曜日）に、今年度の「主権者教育」が、記念館で行われました。18歳成人となり、高校生の上級生は「選挙権」を取得し、実際に社会的政治的な活動に参加することになります。

前橋校長は、「18歳になる生徒の皆さんには、選挙に参加する権利と共に参加すべき義務と責任がワンセットでついてきます。今日は、選挙管理委員会の百瀬英真先生と川島亨平先生にお出でいただきました。」と挨拶されました。

両先生は、『私たちの暮らしの中の選挙』という演題で講話されました。

まず、民主主義国家と非民主主義国家との選挙の違い、誰に投票するか判断のポイントなど、たいへん細かく丁寧に話されていました。

私たちは一人の国民として、義務と権利をしっかりと認識して行動しなくてはならないと思いました。



二輪車安全運転講習会

14日（月曜日）、バイク通学している生徒を対象に、本校駐車場と講義室において、「二輪車安全教育」が行われました。講師は、真岡警察署警察官1名、栃木県二輪車安全運転推進委員会の2名の皆さん。4名の生徒が受講しました。

バイクは、「凶器」と化します。自分が事故の起因にならないよう、心掛けて欲しいと思います。

進路ガイダンスIV

今回の「進路ガイダンス」は、「社会人として身につけたいこと」と題して行われました。

皆さん、職場において「してはいけない新人ランキング」を御存知ですか？既に、以前にも話がありましたので、生徒たちは既に知っていることと思いますが、参考までに記しておきます。

- 第1 挨拶ができない。
- 第2 タメぐちで話す（言葉の使い分けができない）。
- 第3 遅刻が多い（時間を守らない）。

が、上位にランクされました。そう難しいことではありませんが、自己中心的な考え方に基づいて行動してきた生徒にとっては大変なことかも知れません。

お辞儀の仕方と種類、服装、気持ちの良い言葉遣いなどなど、大切な多くのことを学びました。

▲▲10月▲▲

人権教育

台風14号が近づいている（実際には伊豆諸島付近で、南に進路変更してしまいましたが！）9日（金曜日）、本校記念館で、「人権教育」が行われました。講師の先生は、小山市にある中央福祉専門学校講師の飯塚浩史先生。

植竹 暁教頭は、「人権尊重とは、自分や他人の大切さを認めることです。幸せに生きる、掛け替えのない存在が私でありあなたなのです。自分が幸せになるためには、他人も幸せにならなければならない。自分と相手との意見が違ふときには、分かり合うためのコミュニケーションを持つことです。人権尊重は、私たちの暮らしの根底です。」と述べられました。

飯塚先生は、『人間関係とコミュニケーション』と題して、「人権」の基礎に当たる部分の話をされました。

人間に求められる能力とは、①コミュニケーション能力②社会人としての基礎力③主観と客観④自分を変えてくれる友人など、具体的なテーマで生徒達に語りかけました。いわゆる、「いじめとなるSNS などを使いたいやがらせ」の一般的な人権の話は出てきませんでした。健全な人間関係を築く「対人関係」のことや思春期の精神的・社会的な自立の話など、「強い自分」を育成することの大切さを学びました。

全校ボランティア活動

小雨が降っていた23日（金曜日）、本校伝統の「全校ボランティア活動」が学校周辺の市街地で行われました。係の伊沢 敦先生の指導の下、今年度も、真岡西ロータリークラブの皆さんとともに、4つのコースに別れて、街頭のゴミ拾いを実施。中には、世代を超えてロータリアンと交流を持った生徒もいたようです。

今年度は、これまでに見ないほど多くのゴミを集めることができました。「ゴミを拾う」ことも大切ですが、それ以前に「ゴミを捨てない」心掛けの方が重要ではないでしょうか。



修学旅行

3年次生の「修学旅行」が、28日（水曜日）から30日（金曜日）の2泊3日で行われました。

今年度は、新型コロナウイルスの影響で、実施自体さえ危ぶまれましたが、団長の植竹教頭、担任の横川航一先生らのお骨折りで、「平泉・松島」方面の行程表が完成。予定通り、楽しく意義のある修学旅行になりました。

詳しいことは、来春刊行される生徒会誌『白布城』を御覧いただきたいと思います。

校外研修

30日（金曜日）、在校生（3年次生を除く。）は校外研修で、福島県小名浜にある「アクアマリンふくしま」と「ら・ら・ミュウ」に行ってきました。

バスの中では、行きはにぎやかでしたが帰りはスヤスヤと睡眠学習。「アクアマリンふくしま」では、普段目にするのでできない魚の水槽を、興味津々に見学。「ら・ら・ミュウ」では、その一区画にある「3. 11 東日本大震災」の展示物などを熱心に見ていました。

帰途に着く頃にはたくさんの土産物を手に、皆、満足した様子でした。

▲▲11月▲▲

性に関する講話

夕焼け空がきれいだった6日（金曜日）、本校記念館において、「性に関する講演会」が開催されました。今年度も、芳賀赤十字病院の矢島悟子先生をお迎えしての講話です。

以下に、受講した生徒の感想の一部を掲載します。

- ・生と性の違いについて理解できました。
- ・思った以上に踏み込んだ話が多く、すこし驚きましたが、とてもタメになりました。と思います。
- ・私も、いつか母親になったとき、生まれてきてくれた我が子を心から愛情を持って育てていけるように、自分自身が精神的、経済的、社会的に自立して行けるようにしていきます。

定時制祭



13日(金曜日)に生徒会恒例の「定時制祭」が開催されました。今年度は、BGMを効果的に用いることにし、生徒会役員は、「コスプレやファッションショーを全校生徒に楽しんでいただけたかと思います。」と話していました。この催しに際し、役員達は限られた時間の中で、材料の買い出しに奔走したり、ジェスチャーゲームの準備のために200枚の絵をスケッチブックに書き記したりしていました。全学年が一堂に会するたいへん貴重な機会でした。しかし、「全体の時間配分や次の企画への移行に時間がかかってしまったのは、次年度への反省材料。生徒の皆さん、御協力ありがとうございました。」と、臼井生徒会長は話していました。真高定時制らしいひと時でした。

防火防災避難訓練

20日(金曜日)、秋の防火 防災避難訓練が行われました。新型コロナウイルス感染のリスクを避けて、今年度はAEDの実施訓練は行われませんでした。教室から速やかに安全な場所に避難する、移動経路の確認と心構えの再確認を行いました。ほとんどの生徒が、話もせずに早足で避難していました。

薬物乱用防止講話

27日(金曜日)、薬物乱用防止講話が行われました。今回の講師は、栃木県那須塩原市の御出身で、東京都下の警察署等に勤務されていた菊池亨一先生に講話をしていただきました。先生は、警察官になるきっかけや警察官としての体験や経験に基づいた話をされた後、薬物や身近にある「たばこ」の害について分かりやすく話されていました。「たばこ」は、万人が認める有害な製品。興味本位で手を出すと習慣性を帯びてしまう歴とした「薬物」であると強調されていました。

▲▲12月▲▲

校内体育大会

寒さも増してきた24日(木曜日)、学期末恒例の校内体育大会(バレーボール)が、本校講堂で行われました。2学期の体育の授業等で練習を積んできた生徒達は、日頃の成果を発揮し、伸び伸びとボールを追っていました。結果は、次の通りです。

優勝 4年次Aチーム 準優勝 4年次Bチーム

第2学期終業式

いよいよ、今学期も幕を閉じるときが来ました。新型コロナウイルスの流行で、「思い切り」…とは行かなかった生徒もいたかもしれません。また、数々の校外行事もキャンセルになり、不完全燃焼の生徒もいたようです。25日(金曜日)の第2学期終業式にあたり、前橋校長は、小惑星探査機はやぶさ2のミッション成功のニュースから、「熱い思いで粘り強く取り組むことで、困難を乗り越えられる」、私たちも「マスク・手洗い・換気など基本的対策を続けて、何とんでもコロナに打ち勝とう!」と、話されました。

凧の風～あとがきにかえて～

保護者の皆さま、そして、PTA、後援会、自治会の皆さま、新型コロナウイルスの予測のつかない流行の真ただ中、いかがお過ごしでしょうか。

真岡高校定時制の生徒は、明日から冬季休業に入ります。多くの生徒がアルバイトなどで、ゆっくりする暇はないかもしれませんが、今年の反省や来年に向かう意気込みなど、お一人お一人、そして、御家族で振り返り、新たな気持ちで新年をお迎えください。

世界に目をやりますと、新型ウイルスのワクチンが各国に行き渡り、どれだけの民が恩恵にあずかるのか、それにより、新型コロナウイルスの流行は収まるのか、東京オリンピックは…などなど流動的な世界情勢が我がこととして感じられる年になりそうです。

どうか皆さん、3密を避け「手洗い」など、基本的で最も重要な生活習慣を実行し、「新しい日常」を送っていきましょう。どうか、良いお年をお迎えください。(記録・広報係)

ようこそ、地球へ

小惑星探査機はやぶさ2のカプセル、回収成功

私たち（2年次生以上）は昨秋、栃木県立真岡高等学校定時制課程創立50周年（同全日制課程120周年）の記念事業として、講師にお招きした日本宇宙航空研究開発機構（JAXA・ジャクサ）准教授の吉川 真（よしかわ まこと）先生から、進行中の小惑星探査機「はやぶさ2」の話をお聞きしました。

吉川准教授は、栃木県出身。栃木高等学校を卒業してから東京大学で学び、現在、JAXAで研究開発に取り組んでおられます。先生の講演では、満身創痍の初代「はやぶさ」ミッションの苦労話や、はやぶさ打ち上げ時の反省点（200箇所以上あったそうです。）をひとつ一つ潰していき、より完成度の高い「はやぶさ2」をつくり上げた、と話されていました。帰還するのは、来年の12月初旬（講演当日）。現在は順調に行程が進んでいる、という話でした。

結果的には、その時の講演とまったく同じスケジュールで事が運び、津田雄一プロジェクトマネージャ（教授）らと取り組んだ小惑星リュウグウ（地球から約3億^{km}、6年かけて往復する距離）の探査ミッションをミスなく達成して、12月6日午前3時前（日本時間）にオーストラリアの砂漠に着地しました。関係者のたとえ話では、「東京スカイツリーから、富士山頂の1円玉を鉄砲で撃ち抜くくらいの奇跡だ！」とのこと。見事というほかありません。

なお、以下の文章は、12月7日から9日にかけて発行された下野新聞、讀賣新聞、朝日新聞の記事を参考に作製しました。

完璧なミッション



<出典：下野新聞12/15付>

きたと思う。」と述べたのは、本校に記念講演にお出でになった、プロジェクトの中核を担う吉川 真（よしかわ まこと・栃木市出身）准教授です。吉川准教授は、「ミッションマネージャ」の肩書きで、国籍も専門も違うメンバーの調整役となりました。外部への発信役も担い、リアルタイムでの情報提供にこだわってきたそうです。そして、「高いハードルや予想外のことを乗り越えてきた」と振り返り、「驚きの連続だったが、想定以上にデータが取れて探査ができた。」と感慨深げに語っていました。

日本の小惑星探査機「はやぶさ2」から分離された「カプセル（直径約40^{cm}、重さ16^{kg}）」は、日本時間12月6日午前2時54分、地上から22万^{km}離れた宇宙の彼方で切り離され、秒速12^{km}で大気圏に進入し、オーストラリアの砂漠（ウーメラの砂漠地帯）に着地。約4時間半後に回収されたようです。「着地点は、(予測地点に)ドンピシャだった」と、津田雄一教授。1^{km}先にある「テントウ虫」の斑点を狙うほどの高い精度だということです。

100点満点で10,000点

はやぶさ2は、2014年12月に、地球を出発。19年2月と7月の2回、リュウグウに着地し、石や砂の採取に挑んだのです。快挙続きのはやぶさ2ですが、打ち上げまでの道のりは決して平坦ではありません。民主党政権下の「事業仕分け」では、開発予算額が大幅に削減され、計画断念の瀬戸際まで追いつめられ、初代はやぶさの「奇跡の帰還」で息を吹き返した、ということもありました。

カプセルには、小惑星「リュウグウ」の石（約46億年におよぶ太陽系の歴史の情報が詰まった有機物の存在）が入っていると予想されます。

地球と3億^{km}前後離れた小惑星を往復6年かけて往復する探査ミッションをミスなく達成。

6年にわたる探査計画は、小惑星への2度の着陸や史上初の「人工クレーター」の作製をしました。航行距離は、地球-太陽間の約35倍に相当する約52億4000万^{km}に達し、「はやぶさ2」は、カプセルを切り離れた後、地球に衝突する軌道から離れ、当初の計画にはなかった、新たな地球と火星の間を回る小惑星「1998 KY 26」に向けて出発。2031年7月に到着の予定だということです。

津田教授は、「6年間の飛行を終え、完全な状態で『玉手箱』を舞下ろすことができ、100点満点で10,000点！」と喜びいっぱいに話しました。

これまで見守ってきた人々からは、祝福の声が上がり、はやぶさ2の応援歌を作詞した歌手のつるの剛士氏は「火球の映像を見たとき、思わず涙が出た。人工物なのに、人格のような物を感じた。」「お土産だけ残して、次のミッションに向けて（地球を）去って行くなんて格好良すぎる。」と喜んでいました。また、漫画家の松本零士氏は、「精密な技術に感動した。宇宙への進出が、もはや夢ではなくなってきた。」など、多くの感動が寄せられたのです。

未知の世界の扉を開く

JAXAは7日、カプセルの中から、ガスが検出されたことを明らかにしました。小惑星リュウグウの物質から出たものとみられます。ガスは、石に含まれる有機物が温まるなどすると発生すると考えられており、試料（石）の有無を示すひとつの目安となります。

カプセルは真空環境を保ったまま開ける予定で、黒っぽい粒子が確認されれば、リュウグウのものとはほぼ断定できるそうです。その後、半年かけて試料の色や形、大きさなどを記録したうえ、全国の大学・研究機関で来年6月頃に詳細な分析を始めることとなります。

地球外物質研究グループの臼井寛裕（うすい ともひろ）グループ長は、「100点満点で10,000点の状態届けられたものだから、20,000点、30,000点の結果が出るよう分析したい。」と話していました。

■世界は果てしなく広がっていく

かつて、人類は「地球の周りを太陽が回っている(天動説)」という説を信じ、さらに昔は、「地球は平らで地の果ては大きな滝がある。」などと考えていました。これらの説は、コペルニクスの地動説や天体望遠鏡の登場により覆われます。人類の科学力の進歩は目覚ましいものがあります。

旧ソヴィエト連邦の人工衛星スプートニクの打ち上げ成功をかわきりに、アメリカ合衆国のアポロ計画、月面着陸など、人類の宇宙進出は日進月歩で進んでいます。日本人女性初の宇宙飛行士、向井千秋さんの御記憶がある方も多いのではないかと思います。多くの方々が、宇宙から、この美しい地球を眺めています。

この度の、小惑星探査機「はやぶさ2」の快挙も、そのような先人の生み出した技術を礎に、多くの科学者が知恵を集めて創り上げた、いわば「科学の結晶」です。そのクルーの中に、栃木県出身者が多数参加していると言うことに、筆者は驚きとともに誇らしさ、嬉しさを感じております。この、宇宙探査事業が身近なものに感じられるのは、多くの方々の共通の思いではないでしょうか。

本文にも書きましたが、今回の「大成功」の陰には、JAXAの方々の並々ならぬ努力(このような月並みな言葉で表現して良いかどうか、はばかられますが…)があったそうです。今後さらに、さまざまな角度からの報告や発言があると思われませんが、私たちは、それらを注視していきたいと思えます。

この「はやぶさ2」の快挙をもとに、これまで宇宙に関心のなかった方々も、私たちの生活テリトリーやグローバル化された国際関係だけではなく、「壮大な宇宙に生きている」生き物の一人であることを自認して、自らの可能性を信じて、自らの持てる力を自分たちのためだけでなく、世界のために役立てることを考えるときが、到来したのではないのでしょうか。